

気がつけば
函館市民に
なっていた。

Vol.5

普通の町としての地域性

問題となつた地域イメージ

火の付いたタバコを車の窓から棄てたことを、「たぶん中頓別町ではみんなが普通にやつてらる」という件がありました。

文学者として立場なり「あくまでも作品上のこと」と突つ張る手もあるはずですが、本人から、単行本にするときは別の名前に書き換えるという発表があつて落着しました。地方自治体もイメージづくりを重視しているといふ世相に配慮したのかもしれません。

さて、地域のイメージとして、このような住民のモラル、あるいは暮らしやすさといった日常的な要素もありますが、食や景観など観光的な要素もあるかと思います。

函館の場合は観光都市ですから、

ついで後者に目が行くかもしれません。しかし、京都から函館に移り住んだ自分自身を振り返つてみますと、華やかな観光面での魅力より、じく当たり前の日常面での町のありようといった部分に惹かれたような気がしてなりません。

心に残つた函館の風景

観光で函館に来ていたころは、いつも八幡坂下のホテルに泊まり、坂上の港ヶ丘通り界隈を散策していました。

ホテルを出て、まず市電通りを渡ります。ボタン信号を使うのですが、通常のボタンと、青になつてじる時間の長いボタンの2種類があります。やがてこれが函館では当たり前であることに気がつきますが、京都で見慣れていたボタン信号は、通常のボタン一つきりのものばかりでした。

そして港ヶ丘通りへと向かう八幡坂の両側には、手すりのある歩道があり、手すりをはさんだ片側は階段、もう片側はスロープになつてします。信頃にしても、歩道にしても、何と体の強くなつた人々への配慮のある町なだろうと感心しました。幸坂など人通りの少ない坂道でも、勾配のきつい部分には歩道に階段とスロープが

併設されてしまつことを知りました。元町公園や函館公園の階段もスロープが併設されていて、両者がうまく組み合わされ、デザイン的にも洒落たものになつています。

このほか、函館どつづ前電停に置き傘があり、傘立てに「じ自由にお使いください。」と使用後は次回ご利用のときお返し下さることもあつたことも印象的でした。

それとも、函館じ心に刻まれたのは、人々の気安さでした。普通の店に毎日飯を食べに入つても、店の人から「どうぞ」と軽く話しかけられたり、隣の席で食事している地元の人の世間話に入れても、いたりで、どちらかと云ふと他人行儀な京都から来た身としては、居心地のよさを感じたものです。

当たら前のことが、**当たら前以上**なら、

観光都市としての魅力度アップのため、一般市民もホスピタリティ向上させ、簡単な町案内くらつてできるようになれば、とう話も聞かれます。そうなれば、来訪者の満足度が高まり、さすがは観光都市と云う評価にもつながるでしょう。

ただ、いままで観光を意識しなくても、お年寄りや体の強くない人々の

配慮が行き届つてゐる、温かじ口元以上であつたり、それもまたすぐれた地域性として感銘を生むはずです。レンタカー観光をする人なら運転マナーも気になる点です。

市電の電停にしても、旅行気分を盛り上げるようなデザインもさる」とながら、誰もが使える置き傘のよう日常的な心配りが、観光都市という枠を超えて町のイメージを高めていくように思います。



やさしさを感じた階段とスロープ。
左は八幡坂、右は幸坂、下は元町公園

★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

大阪出身。
2011年秋より、函館に移住。
「新はこだてライブラリ」を設立し、函館発の電子書籍・印刷書籍の出版に取り組む。
2012年には、2008年秋から
の函館通いで感じた町の魅力を綴った「新函館写真紀行」を出版。
現在は、移住サポーターとしても活躍している。

